Osaka University Knowledge Archive

Title	ペットとともに、被災後のコミュニティを生き抜く：熊本地震被災地におけるコミュニティ縮退と被災者ーペットの尊厳ある生の事例より
Author(s)	加藤, 謙介
Citation	災害と共生. 2020, 4(1), p. 49-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77177
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ペットとともに、被災後のコミュニティを生き抜く
―熊本地震被災地におけるコミュニティ縮退と被災者-ペットの尊厳ある生の事例より―

Surviving with pets in a shrinking disaster-stricken community
-The case of the 2016 Kumamoto earthquake -

加藤　謙介[1]
Kensuke KATO

要約
本稿では、コミュニティの縮退と、そこに生きる人々の尊厳のあり方を論じるために、災害被災地における「ペット（家庭動物）」を介在するコミュニティの事例から検討を試みた。まず、被災地コミュニティの縮退をめぐる諸問題から、人々の尊厳のあり方に関する視点を整理した。次いで、「人とペットの関係」に関する議論から、特に、「災害」及び「ペットとの死別」場面において、コミュニティとの関係のあり方が、ペットとともに生きる人々の尊厳にとって重要な要因となることを指摘した。その上で、熊本地震被災地における「被災者-ペットコミュニティ」の形成過程、及び、ペットと死別した高齢女性の「喪失の語り」の事例から、被災及び「家族」との死別を契機とするコミュニティの縮退と、そこに生きる人々の尊厳を支えるための関係構築のあり方を論じた。これらを踏まえ、縮退するコミュニティにおける人々の尊厳のあり方について試論を述べた。

Abstract
This paper discusses the shrinking of communities and the nature of the sense of dignity among people living in such communities by examining case studies of communities involving pets in disaster-stricken areas. First, perspectives of people's sense of dignity based on various issues associated with the shrinking of communities in disaster-stricken areas were identified and documented. Next, based on discussions of "relationships between people and pets", the study identified the sense of dignity of people living with pets, especially in disaster situations and bereavement on the death of a pet. On this basis, the shrinking of community triggered by disasters or bereavement on the death of family members was examined based on long-term participant observation, along with the ideal approach for relationship-building to support the sense of dignity of people living in these communities. The discussion is based on the process of formation of "communities of disaster victims and pets" in areas affected due to the 2016 Kumamoto earthquakes and on "narratives of loss" told by elderly women bereaved of pets. Based on these premises, the study discusses the nature of the sense of dignity among people living in shrinking communities.

キーワード: コミュニティ、尊厳、縮退、被災者-ペットコミュニティ、熊本地震
Keywords: community, dignity, shrinking, communities of disaster victims and pets, Kumamoto earthquake

１．はじめに

日本社会における人口減少問題が顕在化する中、コミュニティの「縮退」と、そこにおける人々の「尊厳」のあり方をめぐって様々な議論が行われている（e.g., NHK スペシャル取材班, 2017）。特に、コミュニティの人口減少が、かつてのような山間過疎地域に限定された問題に留まらず、全国各地で生じうることをめぐり、その課題と展望が論じられている。

コミュニティの縮退、及び、人々の尊厳に関する問題を検討するにあたり、まず、広井（2009）によるコミュニティ概念の整理から論を始めよう。広井は、「人間が、それに対して何らかの帰属意識を持ち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」と暫定的な定義を行い、「生産／生活」「農村型／都市型」「空間（地域）／時間（テーマ）」の 3 つの区分を設けて議論を展開している。また、コミュニティの本質的な意味は、家族的関係と、その外部にある社会全体とをつなぐ「重層社会における中間的集団」という点にあり、それゆえ、コミュニティが、「静的で閉じた秩序」（広井, 2009, p.25）ではなく、内部と外部との関係性の構築・再編・維持・変容に

*1 九州保健福祉大学臨床心理学部　准教授・博士（人間科学）
Associate Professor, School of Clinical Psychology, Kyushu University of Health and Welfare, Dr. Human Sciences.

よる動的な特性を有していることを示唆している。

これらの議論を基に、「コミュニティ」とその「縮退」、及び人々の「尊厳」に関わる論点を整理してみよう。コミュニティには、地縁だけでなく、特定のテーマを中心とするつながりも有し、主に連帯・相互扶助に代表される関係が生まれる集団としての特徴がある。また、コミュニティが「重層社会における中間的集団」であることから、その「縮退」は、集団の人口減少を契機とするコミュニティ内外の関係性変容の問題として顕在化しうる。特に、コミュニティの急激な縮退は、当該コミュニティの急速な再編を促すこともあり、ともすれば、望ましい関係の生成だけでなく、関係の途絶や、コミュニティ内外での様々なコンフリクトが生じる可能性もあると考えられる。さらに、コミュニティが家族的関係と社会をつなぐ中間的集団であるため、その縮退は、集団の縮退と、そこに生きる人々に現前する生活世界の縮退とが相即することとなる。それゆえ、コミュニティに生きる人々の「尊厳」のあり方は、集団の動態と、人々に現前する生活世界の動態の 2 つの側面から検討する必要があると言えるだろう。

以上の論点について考察を進めるため、本稿では、災害被災地における、「ペット（家庭動物）」を介在するコミュニティを事例として検討を試みる。まず、被災地コミュニティの縮退をめぐる諸問題から、人々の尊厳のあり方に関する視点を整理する（2 章）。次いで、家族的関係の例として、人とペットの関係に関する議論をまとめ、特に、災害場面及びペットとの死別場面において、コミュニティとの関係のあり方が、ペットとともに生きる人々の尊厳にとって重要な要因となることを指摘する。あわせて、被災地におけるペットを介在するコミュニティとして、「被災者-ペットコミュニティ」という枠組みを導出する（3 章）。これを受けて、熊本地震被災地における「人とペットの減災」の展開過程の事例を取り上げる。その際、災害によるコミュニティの急激な縮退に直面した人々の尊厳ある生にとって、「被災者-ペットコミュニティ」形成のプロセスが有した意義について、集団の動態の側面から検討する（4 章）。さらに、筆者が熊本地震被災地で出会った高齢女性とペットとの関係の事例を精査する。特に、被災及び「家族」との死別を契機とするコミュニティの縮退と、そこに生きる人の尊厳のあり方を、当事者に現前する生活世界の動態から描出する（5 章）。最後に、「喪失の語り」の特徴と「被災者-ペットコミュニティ」との関連を論じ、これらを踏まえ、縮退するコミュニティにおける人々の尊厳のあり方について試論を述べる（6 章）。

２． 被災地コミュニティにおける「縮退」と「尊厳」

コミュニティの縮退と尊厳をめぐる問題に関して、被災地が重要な事例となることは論を俟たないだろう。過去の災害においても、災害サイクルの移行に即して、被災地コミュニティに関わる様々な問題が発生し、その再編のあり方についての議論と実践が重ねられてきた。被災者は、住み慣れた自宅を喪った後、避難所、仮設団地、災害公営住宅と、いくつもの「仮のコミュニティ」での生活を余儀なくされている。それらは、「『仮の住まい』ではあるが、そこにあるのは『仮の暮らし』ではない」（澤田, 2018）。それゆえ、様々な形での被災地コミュニティ支援がなされてきた。例えば、菅（2007）は、阪神・淡路大震災時の仮設団地の事例より、日常的な交流を通じた支えあいの仕組み、即ち、従前の「地域的なつながり」を代替するようなコミュニティづくりの有効性を指摘している。

しかし、長期にわたる「仮のコミュニティ」での生活やその移行期において、個々の被災者は、しばしばコミュニティの縮退や途絶の危機に直面することになる。例えば、阪神・淡路大震災では、仮設団地コミュニティが住民らの元々のコミュニティと乖離していたため、孤独死をはじめ様々な問題が発生した（e.g., 室崎, 1997）。新潟県中越地震では、集落移転に伴う人口流出によって、復興に向けたコミュニティづくりに課題が生じることとなった（e.g., 渥美, 2014）。災害発生からの時間の経過とともに、縮退するコミュニティに残された「規格化できない人々」が、「取り残される」感覚を持つことが少なくない（阿部, 2013）。特に社会の中で受苦者やマイノリティになりがちな「障害」「老い」「病い」「異なり」にある人々（障老病異）（渡辺, 2015）は、被災後のコミュニティにおいて、「被災のイクスクルージョン」（栗原, 2015）と呼ばれる排除に直面する危険すらある。だからこそ、復興に向けた被災地コミュニティでは、宮本（2016）が減災が目指すものとして掲げた 3 つの視点、即ち、「災害直後の生き死にを対象とするだけではない生き生きと充実した生の実現」「生の実現のための主体性の獲得」「主体性の獲得のための、互いをかけがえのない存在として認め合うような双方向的な関係」が求められることになる。

以上の議論を受け、コミュニティの「縮退」と、人々の「尊厳」に関する論点を整理しよう。災害に

伴うコミュニティ再編では、従前の地縁的つながりを補完・代替するような関係構築が目指される。しかし、長期にわたる被災生活の過程で、コミュニティの急激な縮退が発生することがある。その結果、コミュニティ内外の関係性が途絶し、被災地コミュニティに生きる人々にとって、様々なコンフリクトや深刻な喪失体験がもたらされるおそれがある。それゆえ、このような縮退するコミュニティに生きる人々ひとりひとりにとって、「生き生きとした生の実現と主体性の獲得を実現するような、相互承認的な関係がある状態」を「尊厳」と捉え、その実現を目指すことが必要になると言えるだろう。

３．「家族としてのペット」

さて、近年の日本社会では、「ペット（家庭動物）」を「家族」とみなす飼い主が増加している（e.g., 山田, 2004）。犬猫等に代表されるペットは、人間とは異種の動物であり、伝統的な家族概念に該当しない。しかし、家族としてのペットとその飼い主との間には、「ヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆）」と呼ばれる情緒的結びつきがあるとされ、「コンパニオンアニマル（伴侶動物）」という呼称も広がりつつある（e.g., 桜井・長田, 2003）。

グループ・ダイナミックスの観点からすれば、「家族としてのペット」という関係性は、日々の飼育・ケアの場面での飼い主-ペットの相互作用、即ち濃密な身体の互換によって生成された規範（大澤, 1991）の効果であると考えられる。日常生活場面において、この関係性が、規範の効果によって擬制されたものであることが破綻することは少ない。また、コミュニティとペットが関連付けられることも多くはない。しかし、その規範に綻びが生じ、ペットが「家族／動物」の両義的存在であることが露呈するとともに、飼い主-ペットとコミュニティとの関係のあり方が問題として顕在化する場面がある。ここでは、「災害」と、「ペットとの死別・離別（ペットロス）」の２つを取り上げ、論点を整理しよう。

3.1　災害とペット：コミュニティとの関係より

災害時における支援対象としてのペットは、阪神・淡路大震災を契機に注目を集め、以降の被災地で様々な支援のあり方が検討されたが、東日本大震災で問題が極大化することとなった（加藤, 2013）。特に、ペットとともに「同行避難」した飼い主が避難所等で受け入れを拒否される事例が多数報告された（e.g., 児玉, 2011）。こうした事例は、平常時には特に問題視されなかったペットとの関係が、災害発生による従前のコミュニティの急激な縮退に伴い、コンフリクトの要因として顕在化したことを表している。その結果、被災した飼い主とそのペットは、被災地コミュニティの中で「被災のイクスクルージョン」に見舞われ、まさに尊厳が脅かされる事態に直面することとなったと考えられる。

東日本大震災の被災三県（岩手・宮城・福島）で65 名の飼い主への聞き取り調査を実施した梶原（2019）は、避難所等のコミュニティで、家族であるはずのペットが単なる動物として扱われ、避難先を転々とせざるを得なかった事例等を、丹念に聞き取っている。その上で、梶原は、津波災害地域で、飼い主にとってペットが「生を紡ぐコンパニオン」となり、「飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり、全ての選択の中心になっている」関係性があることを論じている(1)。梶原の議論は、被災者にとってペットが、被災後の行動選択の基準となるだけでなく、生活再建をめぐるライフストーリー再構築において、重要な＜バイ・プレイヤー＞（矢守, 2010）の役割を果たしていることを示唆している。一方、梶原の報告もまた、被災者とそのペットが、被災地コミュニティとの関係において、尊厳の危機に直面したことを示している。被災者-ペットが尊厳をもって生き抜くために、災害によって縮退に見舞われたコミュニティの再編のあり方が問われることになると言えるだろう。

「人とペットの災害対策」では、一般に、飼い主の自助が強調されている（環境省, 2018a, b）が、「被災のイクスクルージョン」を回避するため、被災地コミュニティにおけるペットとの関係構築についても、知見が蓄積されつつある。例えば、避難所コミュニティにおけるペットと人との「棲み分け」（平井, 2016）、仮設団地での「ペットクラブ」活動（齊藤, 2016; 梶原, 2019）、災害復興公営住宅でのペット飼育環境の整備（山地, 2013）等である。これらの先行研究では、被災地での「仮のコミュニティ」の移行の度に、「ペット問題」が顕在化することが示されている。また、単にペット飼育のための物理的環境の整備に留まらず、被災した飼い主とそのペットも含め、被災地の人々全員が尊厳をもって生きていくためのコミュニティのあり方が問われている点が重要である。ホームレス支援に関わる精神科医・森川（2013）の言葉を援用すれば、災害によって被災者が奪われたのは、単に住環境としての家（ハウス）だけではなく、安心して生きていく場（ホーム）であると考えられる。それゆえ、ペットを含めた被災

者全員にとって、安心して生きていける場となるようなコミュニティ再編が必要になると言えるだろう。このコミュニティは、ペットとの関係性を起点としながらも、ペット飼育者と非飼育者、さらには、災害ボランティアや専門家等の外部支援者との関係も含まれるものとなる。このような、ペットを介在し、ペットとの関係性を起点としつつも、被災したすべての人々が尊厳をもって生きることを目指すコミュニティのあり方を、本稿では、「被災者-ペットコミュニティ」と呼ぶことにしよう。

ここまでの議論を整理しよう。災害は、コミュニティの急激な縮退をもたらすことで、「家族としてのペット」規範を崩壊させ、本来ペットが持っている両義性を顕わにする。飼い主が、被災後の生活をペットと共に尊厳をもって生き抜くために、それぞれのコミュニティにおけるペットとの関係性の再構築が求められることになる。その際、ペットとその飼い主を含めた、被災地に生きる人々全てが安心して生きていける場・コミュニティづくりを目指すことが求められる。これらの論点については、4 章での事例を通して、具体的に検討していくことにしよう。

3.2 「ペットロス」をめぐる論点：「喪失の語り」

さて、災害時・平常時を問わず、ペットとの離別・死別は、飼い主に様々な困難をもたらすことになる。ペットとの離別・死別は「ペットロス」と呼ばれ、様々な議論が行われているが、本稿では、木村（2009）に倣い、「飼育動物の喪失体験」と定義し、典型的な「対象喪失」（小此木, 1979）のひとつと位置づける。愛着対象の喪失であるペットロスでは、飼い主に悲嘆に伴う様々な気分障害・身体化症状が生じることも珍しくない。生活の激変等の要因がある場合、専門的な介入が必要となる場合もありうるが、多くは「悲哀の仕事」（小此木, 1979）の進展に伴い、飼い主は死別の悲しみに向き合えるようになっていく。

しかし、他の喪失体験と比較したペットロスの特異性として、飼い主と周囲との間に、ペットの死別・離別に対する認識の大きな差が生じうることが、しばしば課題となっている。新島（2001）は、ペットロス場面において、ペットに関わるリアリティが他者との関係において承認されず、個人間でのリアリティのずれが顕在化する「リアリティ分離」が生じること、また、その結果、ペットの存在とその死別の重要性を主張できなくなり、自ら断念・放棄せざるを得なくなる「リアリティ封殺」が生じることを論じている。このような事態は、ペットロスが、単なる個人的な喪失体験や、関係性の縮退・途絶であることに留まらず、飼い主が生きるコミュニティ内外での関係性のあり方によって、当事者の尊厳に関わるような、より困難な問題となることを示している。また、その結果、ペットロスが、しばしば「公認されない悲嘆」（e.g., 坂口, 2010）のひとつとなりうることを示唆している。

島薗（2019）は、グリーフケアの歴史と文化を整理する中で、悲嘆の心理的特徴が、「意味世界の再構築」という言葉で要約できると論じている。「悲嘆とともに生きる道を求める人々は、亡き人の像を心に抱きながら生きる意味を捉え直し、世界を意味づけ直そうとしているのだ。」（島薗, 2019, p.116）。それゆえ、グリーフケアに求められるのは、特殊なスキルではなく、「悲嘆を分かち合い、分かちもつ場や関係」、即ち、「ともに悲嘆を生きる」ための交わりの場・関係であると島薗は指摘する。

「家族としてのペット」を喪った時、人は、その死別の悲しみを語ることさえできない状況に直面する場合がある。ナラティヴ・アプローチの観点に拠れば、ペットロス場面での「悲嘆を分かち合い、分かちもつ場や関係」で求められるのは、ペットの存在とその死別の重要性を軽視するような「ドミナント・ストーリーへの抵抗」を、「自分の経験に即して語る」ことができる場の構築である。このような社会空間を、野口（2005）は、「ナラティヴ・コミュニティ」と呼んでいる。野口は、「新しい『現実』は何度も語られなければならない。ただ想像したりイメージしたりするだけでは不十分であり、誰かに向かって語られることではじめてそれは『社会的現実』となる。このとき、そのリアリティは、その『語り』を『理解し評価する』ひとびとの存在によって支えられている。」と論じている（野口, 2005, p.181）。その上で、「ナラティヴ・コミュニティ」を、「単にひとつの物語を共有し再生産するのではなくそれを新たに展開させていく場」「『新しい語り』、『いまだ語られなかった物語』を生み出すための場」「『解釈の共同性』よりも、『語りの創発性』によって特徴づけられる社会空間」と定義している（野口, 2005, pp.184-185）。

以上の議論を整理しよう。「家族としてのペット」との死別・離別は、飼い主にとって、ペットロスという喪失体験をもたらすが、飼い主が生きるコミュニティとの関係性によって、より困難な問題となり得る。飼い主が、ペットロスという関係性の縮退に、尊厳をもって向き合うためには、自身のことばでオルタナティブ・ストーリーを語り、その「喪失の語

り」（やまだ, 2007）を適切に聴きとってもらうことができるコミュニティ、即ち「ナラティヴ・コミュニティ」の構築が求められることとなる。これらの論点の具体的検討は、5 章で詳述する事例に基づき、深めていくことにしよう。

４． 平成 28 年熊本地震被災地における「人とペットの減災」の展開

「平成 28 年（2016 年）熊本地震」では、2016 年 4 月 14 日・16 日の 2 度にわたる震度 7 の激震で、熊本県・大分県を中心に甚大な被害がもたらされた。熊本県内では、災害関連死も含めた死者 272 人、重傷者・軽症者 2,734 人、全壊・半壊・一部破損を含めた 198,185 棟の住家被害が報告されている（熊本県危機管理防災課, 2020）。地震発生後、住居を喪った被災者の多くは、避難所、仮設団地、災害公営住宅と、現時点に至るまでいくつもの「仮のコミュニティ」での生活を余儀なくされている。

筆者は、2016 年 4 月 16 日の「本震」直後から、益城町総合運動公園避難所・同町テクノ仮設団地を中心に、ペットと「同行避難」した被災者及び現地支援者との協働的実践（渥美, 2014）を重ねてきた。本稿執筆時点（2020 年 3 月下旬）までに、筆者は 155 回被災地を訪れ、計 215 日間滞在している。研究者の視点からは、滞在中の諸活動を広義のフィールドワークと捉え、その記録をまとめるとともに、被災したペット飼育者に対して、ペットとの被災後の生活状況とその課題について聞き取りを行ってきた。一方、災害ボランティアの視点からは、仮設団地での「人とペットの共生まちづくり」に関わる諸活動とあわせて、被災地で出会ったペットの写真撮影・贈与の活動を継続している。記録を兼ねて撮影してきた写真は、本稿執筆時点で 13,212 枚となった。

熊本地震は、「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」（環境省, 2013）制定後初の巨大災害だったこともあり、被災地ではペットに対して様々な支援が行われることとなった（環境省, 2018c）。以下では、「人とペットの減災」の展開過程について、加藤（2017, 2018）を基に、最も被害が大きかった熊本県益城町における避難所及び仮設団地の事例を整理しよう。

益城町の避難所では、地震発生直後から、大勢の被災者がペットを連れて避難してきた。同町最大の益城町総合運動公園避難所は、当初、ペットの屋内同居が容認され、また NPO によるペット同居可のテント村が開設されたこともあり、被災地内で最もペットが集まってきた避難所となった。しかし、避難生活の長期化に伴う様々な問題によって、発災 1 か月後に、町よりペットの屋内飼育禁止・テント村撤退要請の通達が出されることとなった。これを受けて、被災ペット支援のための官民協働のプロジェクトが立ち上がり、同避難所に、避難ペットの一時預かり施設「益城町わんにゃんハウス」が供用されることとなった。開設当初、ハウスにペットを預けることに不安と抵抗感を覚える飼い主も少なくなかったが、施設スタッフの尽力によりペットが適切にケアされたことで、次第に慣れていったという。飼い主の自助・互助、施設スタッフや外部ボランティアによる共助が重ねられたことで、「わんにゃんハウス」利用者らは、恙なく避難所生活を終えることができた。

町内の避難所閉所後、多くの飼い主は仮設住宅に転居することとなった。益城町内の仮設住宅はペットの屋内飼育が許可されていたため、さしあたり、ペットとその飼い主の住環境は保障された。しかし、516 世帯・1300 人が生活する同町最大のテクノ仮設団地では、ペット飼育をめぐる住民トラブルが多発することとなった。自治会設立も難航し、トラブル対応が苦慮される中、「わんにゃんハウス」で関係ができた飼い主有志と現地支援者らが協働で、「人とペットの共生まちづくり」に関わる企画に取り組むこととなった。飼い犬の飼育マナー教室、愛犬同伴のゴミ拾い、住民交流会等のイベントが定期的に開催されることで、飼い主らのマナー意識が向上し、ペットを飼っていない住民からのクレームも弱まることとなった。また、「バンダナ」「お散歩バッグ」「ペットの表札」等を共同制作する中で、ペットを飼っていない住民も含めて良好な関係が構築されるようになった。イベントは 2016 年 11 月から現時点に至るまで 24 回開催され、住民らは大きなペットトラブルもなく、仮設団地での生活を送ることができた。

各事例の詳細は引用元の文献を参照頂くとして、ここでは、本節で紹介した 2 つの事例を、コミュニティの縮退と、そこに生きる被災者-ペットの尊厳を支える新たなコミュニティ形成の動態という視点から論じよう。熊本地震発生によって、飼い主とそのペットは、従前のコミュニティの急激な縮退に見舞われた。被災した飼い主らは、まず、益城町総合運動公園避難所という「仮のコミュニティ」に身を寄せた。同避難所では、発災当初から、ペットを含めた被災者の尊厳を守るためのコミュニティ再編が目

指されたが、被災生活の長期化に伴い、それが困難な状況となってしまった。このため、「益城町わんにゃんハウス」という、避難ペットのための新たな住環境が整備されることとなった。重要なのは、単にペットの住環境整備をするだけでは、被災した飼い主らの不安は払拭されなかった点である。飼い主の自助・互助、施設スタッフや外部ボランティアらの共助が重ねられ、「わんにゃんハウス」が「被災者-ペットコミュニティ」として構築された結果、ペット・飼育者・非飼育者を含む全ての避難者（被災者）の尊厳ある生が実現することとなったと考えられる。

一方、災害サイクルの移行に伴い、避難所から仮設団地へと「仮のコミュニティ」が再編される中で、飼い主とそのペットは、ペット飼育をめぐる住民トラブルという新たな困難に直面することとなった。このことは、ペットの屋内飼育許可という住環境保障だけでは、飼い主-ペットを含む仮設団地住民（被災者）の尊厳ある生が直ちに保障されるわけではないことを示している。また、避難所で形成された「被災者-ペットコミュニティ」が、復興過程の進展に伴う「仮のコミュニティ」再編によって、急速な縮退に直面したことも示されている。それゆえ、益城町テクノ仮設団地では、住民有志と現地支援者が協働で「人とペットの共生まちづくり」を企画・運営することで、ペット・飼育者・非飼育者・外部支援者を含む新たな「被災者-ペットコミュニティ」が築かれていき、結果として、ペットを含む被災者らの尊厳ある生が保たれることとなった。

「被災者-ペットコミュニティ」形成においては、ペットとその飼育者だけでなく、非飼育者も排除しないかたちでコミュニティ再編が行われたことも重要である。被災地コミュニティの縮退に伴う「被災のイクスクルージョン」に抗するため、「被災者-ペットコミュニティ」は、ペットとの関わりを起点としつつも、飼育者・非飼育者・外部支援者が、それぞれの立場から、「人とペットの減災」を目指す実践共同体への参加（レイヴ・ウェンガー, 1991）が可能な様態となっていた。多様な主体の参加に開かれたコミュニティ形成は、結果として、より多くの被災者を包摂する、インクルーシブなコミュニティ構築に寄与していたと言えるだろう。

５．　熊本地震被災地でのペットをめぐる「喪失の語り」

前章で論じたように、熊本地震被災地では、被災した飼い主とペットは、従前のコミュニティの急激な縮退に見舞われ、尊厳ある生の危機に直面した。これに対して、「被災者-ペットコミュニティ」という新たなコミュニティの構築は、災害に伴うコミュニティの縮退に抗し、被災地に生きる人々の尊厳ある生の実現に寄与したと考えられる。このようなコミュニティの動態の中で、ペットとともに生きる被災者にとってより深刻な状況をもたらす事態も生じた。それが、被災生活の中でのペットとの死別である。

熊本地震被災地において、筆者はこれまでに 10 数件のペットとの死別の場面に関わった。死亡時期や死因は多様であり、震災との因果関係は不明であるが、少なからぬ飼い主が、「地震がなければ死なずに済んだのに」と、災害とペットの死を関連付けて語り、深く悲しんだ。特に、「このペットが自由に遊べるように早く自宅再建したい」等、ペットの存在が自身の生活再建の目標と深く関連付けられていた飼い主ほど、死別の悲嘆が深く、生活再建の道筋が見えない状況にある飼い主ほど、ペットとの死別に伴う目標喪失の影響が深刻であるように見受けられた。

筆者は、熊本地震被災地で、「被災ペットの写真撮影・贈与」の活動を続けているが、このような場合、期せずして筆者が撮った写真が、そのペットの「遺影」になってしまうことがあった。ほとんどの飼い主は、幸いにもこの写真を喜び、仮設住宅や新居に飾ってくださった。しかし、1 人だけ、受け取ってくださらなかった方がいた。それが、S さんである。本節では、筆者が熊本地震被災地で出会った S さんとペットの被災生活の経緯を整理することを通して、被災者とそのペットが関わるコミュニティの形成と縮退の展開過程について記述する。S さんは 70 代の女性であり、愛犬のミニチュアダックスフント・クッキー（オス・11 歳）とともに被災後の生活を送っていた。筆者は、益城町内の避難所を訪問する過程で S さんと出会い、これまでに 100 回以上の面会を重ねてきた。

後述するように、被災生活の中で、S さんは、夫と愛犬の「2 人」の伴侶を喪う経験をされた。本節では、3 年 11 か月にわたる筆者と S さんとの関わりを、S さんと愛犬との生活場面を中心に、エスノグラフィーとしてまとめた。また、2020 年 2 月 1 日に実施した S さんへのインタビュー結果を用い、ペットの喪失をめぐる語りの特徴を整理した。

5.1　エスノグラフィー：Ｓさんとクッキー

【S さん・クッキーとの出会い（2016 年 4 月）】

筆者が S さんと最初に出会ったのは、2016 年 4 月 23 日、益城町総合運動公園避難所への 2 度目の訪問

の時であった。S さんは、NPO が開設したペット同居可のテントの 1 つに、愛犬クッキーとともに避難生活を送っていた。テント内には、他に同年代の女性 2 名とその飼い犬 3 頭が避難していた。クッキーはおだやかで人懐っこい性格で、初対面の筆者にも近寄って愛嬌をふりまいていた。筆者は S さんたちからお話を伺い、クッキーの写真を撮らせてもらった。

翌週・4 月 29 日に再びテントを訪れ、撮影したクッキーの写真を手渡すと、S さんは、「10 年（クッキーと）一緒に暮らしているけど、ツーショット写真がなかったの！」と大変喜ばれた（図 1）。筆者は、自己紹介を兼ねて、三方に、職場で飼育する 2 頭のセラピー犬[2]が印刷されたポストカードを手渡し、自分もペット飼育者であり、被災飼い主とそのペットの手伝いのために訪れたことを改めて伝えた。

図 1　テント内での S さんとクッキーのツーショット写真（一部トリミング済）

筆者にとって、発災直後の被災地に支援者という立場で関わるのは、熊本地震が初めての経験であり、当初、被災者との関わり方に苦慮していた。しかし、S さんたちとの関わりを通して、「ペットの話を聞く」「ペットと関わる」「ペットの写真を撮って贈る」等、ペットを介在した関係づくりを端緒にするのが、特に被災した飼い主にとって抵抗感が少なく、自然な関係が築きやすいことに気づかされた。以後、筆者は現在に至るまで、被災ペットの写真撮影とその贈与の活動を継続することとなった。

S さんたちは、テント内は体育館内避難所よりも個人スペースが広く、犬と一緒に避難生活がしやすいと語った。一方、テントが体育館内の生活施設から遠く、雨漏りや高温などの暮らしにくさがあるとも述べていた。ともあれ、S さんたち飼い主は、「ペットと一緒に居られる場所がある」ことを大変心強く思っているように見受けられた。

【テント村閉鎖・「わんにゃんハウス」での生活（2016 年 5 月～8 月）】

発災から 2 週間が経ち、避難者の疲労が蓄積する中、熊本周辺では猛暑と豪雨が追い打ちをかけ、避難所施設やテント村の住環境は、次第に厳しいものとなっていった。ついに、益城町では、2016 年 5 月半ばからの避難所内ペット同居の禁止と、テント村の撤退要請がなされることとなった。

これを受け、益城町総合運動公園避難所には、避難ペットの一時預かり施設「益城町わんにゃんハウス」が開設されることとなった。一方、テント村を運営する NPO も、町内の別の場所にペット同居可のユニットハウス開設の準備を進めていた。しかし、これらの情報は、テント村を利用する飼い主たちには、十分に行き届かなかったようである。このため、テント村利用者は、しばらくの間、ペットとの避難生活の先行きが見通せない状況に置かれることとなってしまった。

筆者は、この当時、「わんにゃんハウス」運営者らとの連携を深めていたが、S さんをはじめとするテント村利用者のことも気がかりであり、益城町に訪れるたび、S さんたちのテントにも足を運んだ。5 月 14 日には「わんにゃんハウス」の説明会が開催されたが、この時は、テント村利用者に対しては積極的な情報提供がなされず、出席した S さんは、「どうせ私たちは（ハウスを利用できる順番は）一番最後なんでしょ」と、憮然として呟いていた。また、当初 S さんと同居していた 2 人の飼い主も、復旧した自宅や町外の賃貸住宅に転居し、テント村を退去することとなった。独りテントに残され、悄然とする S さんを見かねて、筆者は、自分の立場から言うべきかどうか逡巡しつつも、S さんに、テント村から体育館に転居し、「わんにゃんハウス」にクッキーを預けて、私たちと一緒に頑張りませんか、と声をかけた。しかし、その時には、S さんから転居の回答は聞かれなかった。

5 月 22 日、筆者は「わんにゃんハウス」スタッフとともに、S さんのテントを訪れた。テントの中央で寝そべるクッキーを囲みながら、筆者らは、S さんの話を伺うこととなった（図 2）。

図 2　S さんの話を聞く筆者ら
（一部トリミング済）

S さんは、認知症になったご主人が施設に入っており、被災後も、時々見舞いに行っているとのことであった。ご夫婦に子どもはなく、近所に住んでいた弟さんも、地震を機に、県外の親族宅に転居したという。「主人がいるから、町を離れられないでしょ？」筆者が S さんのご家族の事情の詳細を聴いたのは、この時が初めてであった。被災後の生活や介護の苦労等について話を重ねる中で、S さんは、「体育館に引っ越します。やっぱり、このテントはしんどいもの」、と決然としたように語った。筆者らは、傍らにいるクッキーの背中を撫ぜつつ、ただ肯きながらそのことばを聞くばかりであった。

その翌週、S さんは転居手続きを済ませ、クッキーを「わんにゃんハウス」に預けての避難生活を送ることとなった。当初、クッキーを預けることに不安と戸惑いを感じていたそうだが、ハウススタッフらの献身的な尽力で、クッキーが元気に過ごしているのを目の当たりにし、安心感が増していったという。「今まではクッキーのことをずっと気にしてなきゃいけなかったけど、預けられたらぐっすり眠れるようになって（笑）」と、後に S さんは笑いながら語るようになった（図 3）。

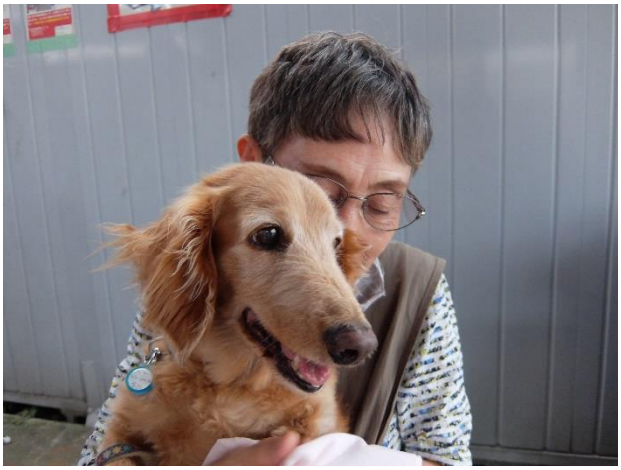

図 3　「わんにゃんハウス」での S さんとクッキー

「わんにゃんハウス」でのペット飼育が軌道に乗り、飼い主による自助・互助、運営スタッフによる支援が重ねられる中で、S さんをはじめとする飼育者の避難生活は、ようやく安定してきたように見受けられた。ハウスが開設されて 1 か月も経つと、飼い主やスタッフが夜遅くまで談笑する姿が見られるようになり、その輪の中に S さんがいることもしばしばあった。この頃には、筆者が S さんに贈ったクッキーの写真は 100 枚以上になっていたが、S さんは全ての写真を大切に保管しており、新しい写真を渡すたびに大変喜ばれた。「こんなにたくさん写真をもらっちゃって。仮設住宅の壁にいっぱい貼らなきゃ！」仮設団地への転居の予定が見え始めたこの時期には、S さんからこのようなことばも寄せられた。「わんにゃんハウス」で築かれた飼い主･支援者コミュニティでの避難生活の中で、S さんは、ようやく先を見通せることばを語れるようになったのではないか、と筆者は感じた。

【仮設団地での生活･夫との死別（2016 年 8 月～2017 年 9 月）】

避難所生活を恙なく終えた S さんは、2016 年 8 月に、クッキーとともに益城町テクノ仮設団地へと転居した。元々屋内飼育だったクッキーは、仮設住宅での生活にも程なくして慣れたという。室内でのペット飼育は問題がなかったが、狭小過密な仮設団地内では、ペット飼育をめぐってトラブルも発生していた。S さんは飼育マナーの意識が高く、クッキーへのしつけも十分に行き届いていたが、他の住民から思わぬ苦情を寄せられることもあったという。こうした経緯を踏まえて、4 章でも整理した「人とペットの共生まちづくり」企画が始められることとなった。

2016年11月20日に開催された初回のイベント、「第1回わんわんマナーアップ大作戦」に、Sさんは、クッキーとともに熱心に参加した。専門家による「しつけ教室」の内容を率先して実践したのもSさんであった。また、愛犬同伴のゴミ拾いも楽しんでおり、「自分たちが主体的に仮設団地をより良くしていくこと」に、やりがいを感じておられるようであった（図4）。

図4　「わんわんマナーアップ大作戦」に参加するSさんとクッキー

仮設住宅での生活が落ち着き始めた2017年年始早々、筆者は、Sさんのご主人が亡くなったとの連絡を受けた。Sさん宅を訪ねた筆者がお悔やみの言葉を述べると、Sさんは、「介護が長かったから、ちょっとほっとしています」と述べ、寂しげな笑顔を見せた。そして、足元にいるクッキーを見やり、「まだクッキーがいるからね」と語った。

筆者は、その後もSさん宅を訪れ、クッキーの写真撮影・贈与を続けた。社交的なSさんは、仮設団地外に友人も多く、長年続けてきたサークル活動を楽しみにする日々を送っていた。また、ペット関連に限らず、仮設団地内の他のイベントにも意欲的に参加されているようであった。

この時期、Sさん宅での話題の中心は、仮設団地内での生活から、生活再建の方向性に関わるものへと変わりつつあった。高齢で子どもがいないSさんにとって、特に自宅再建をすべきかどうかが難題になっていた。「やっぱりこの子（クッキー）もいることだし、家を建て直して、元の場所で暮らした方がいいと思うのよねえ」。クッキーが傍らにいる中、Sさんは筆者に対してこのように語った。この時期には、Sさんに贈ったクッキーの写真は数百枚になっていたが、いつもSさんは喜んで受け取り、大切に保管されているようだった。ご主人が他界された後、生活再建の方向性を定める際に、クッキーの存在が、Sさんにとって特別な役割を果たしているように、筆者には感じられた。

【愛犬との死別・その後（2017年9月～）】

「第5回わんわんマナーアップ大作戦」開催を控えた2017年9月18日、仮設団地で共に活動する現地支援者から、クッキーが急死したとの連絡が入った。9月17日、いつもの散歩から帰宅した直後、急に亡くなったという。驚いた筆者は、急いでSさんに電話をかけた。Sさんは、「まあ覚悟はできていましたからねえ。今までかわいがってくれてありがとうございました」と言葉少なに言うと、電話を切ってしまった。

9月23日、イベントのために仮設団地に訪れた筆者は、仲間の支援者とともに、クッキーの霊前に供花した。イベントへの参加を促してみると、Sさんは、「もちろん参加しますよ！」と答えられた。だが、室内に飾ってあったクッキーの写真は全て片付けられ、ご主人の仏壇の傍らに、クッキーの骨壺と首輪が置かれているだけになっていた。筆者は、もしよかったら、と、これまでの写真をアルバムにして贈ることを提案してみたが、Sさんからは、「そんなことはしなくていいから！」と、やや語気強いことばが返ってきた。

クッキーの死によって、筆者は、ペットを直接介在させたSさんとの関係づくりが絶たれてしまった。しかし、Sさんの死別の悲しみの深さは、あれだけ贈っていた写真を全て片付けてしまったことからも明らかであった。このため、筆者は、仮設団地に訪問するたびにSさん宅を訪ね、ペット関連イベントにも必ず声をかけるよう心掛けた。幸い、Sさんは、特に用もなく突然訪れる筆者を嫌がることなく、いつもお茶を入れて出迎えてくださった。また、クッキーとの死別後も、Sさんはペット関連イベントに積極的に参加を続け、活動や交流を楽しんでいるようであった。イベントや仮設団地での生活を通して知り合った他の飼い主たちもSさんとの交流を続け、自然にSさんを気遣っている様子が見受けられた。

この時期のSさん宅での会話は、日々の生活に関わる何気ないものがほとんどであり、当初、クッキーのことは、全くと言っていいほど話題に上らなかった。数か月が経った頃から、「あの頃はクッキーがいたから」等、話題の端に少しずつクッキーの名前が出るようになったが、クッキー自体を話題にするには、さらに時間が必要であった。また、生活再建

の方向性について、S さんは、「やっぱり家を建て直さなくて、公営住宅に入ろうと思うの。ひとりになって家を建ててもねえ」等、これまでとは異なる選択肢を検討していることを語るようになった。

2018 年 9 月、クッキーの 1 周忌を前に、筆者は再度、S さんにクッキーの写真を贈ることを提案したが、「いや！まだ写真は見たくない！」と断られてしまった。このため、この時も花を贈ることにした。供花を届けに S さん宅を訪れると、クッキーの骨壷は、まだ仏壇の傍らに置かれていた。「お骨もねえ、どうしようかと思うんだけど…。まあ、いいわよね？ずっと置いてても」と S さんは語った。筆者は、「人それぞれですからねえ。まだ置いてても大丈夫ですよ」と答えた。

2018 年 11 月、仮設団地にて、県外のアーティストを迎えてのペット関連イベントが開催されることとなった。テクノ仮設団地での取り組みがちょうど 2 周年になると考え、筆者は、これまでに撮影した写真を用いて、2 年間の全てのイベントを、それぞれ A3 サイズのパネルとして作成・展示した（図 5）。

図 5　「人とペットの共生まちづくり」イベントのパネル展示

イベント中、他の参加者らとパネルを見ながら思い出を振り返る中、S さんは、写真の中に、2017 年 5 月のイベントに参加していたクッキーの姿を発見した。「ああ、クッキー…」と静かに涙を流した後、S さんは、傍らにいた筆者に、「先生、この写真はいただいてなかったんじゃないかしら？」と尋ねた。「ありゃ、渡してなかったでしたっけ？」「うん、たぶんもらってませんわ」等のやり取りの後、筆者は S さんに、次回訪問時に写真を持参することを約束した（図 6）。

図 6　パネルにあったクッキーの写真

筆者はその後も、S さん宅への訪問を続けた。先の写真を渡した後も、クッキーのことは時々話題に上る程度であった。それでも、1 枚の写真を受け取られたことは、S さんにとって、クッキーの死をめぐる悲嘆の過程が、少しずつ進んでいるのを示しているのではないか、と筆者は感じた。

一方、被災地の復興が進展する中、徐々に仮設団地からの退去者が増えていった。2018 年の年末頃、S さんは戸口に立って周囲の部屋を見回しながら筆者に語った。「この並びは、もう私しか住んでいなくて。一人暮らしは慣れてるけど…。やっぱり、ひとりひとり出られていくのは、さみしいわねえ」。2019 年に入ると、ペット飼育者の数もますます減少し、イベントの開催や継続も困難な状況になった。筆者は、月に 1・2 回程度訪問するだけではあったが、空室の目立つ仮設団地に身を置くと、S さんはじめ残された住民の方々の心細さを、感じずにはいられなかった。

【S さんへのインタビュー依頼（2020 年 1 月）】

2020 年 1 月、筆者は S さんに、被災後のクッキーとの生活についてのインタビューへの協力を依頼した。S さんは、「え、今さら？」と呆れたように言われたが、インタビューには快諾していただけた。「クッキーはね、主人が連れて行ったんじゃないかと思うんですよ」と、その時 S さんは語った。

インタビューがこの時期になったのは、S さんの悲嘆の過程の状況、災害公営住宅への転居時期等の復興状況に加えて、筆者自身の事情にも拠った。2019 年 6 月に、筆者の職場で 10 年間飼育しているセラピー犬のうちの 1 頭・フレンチブルドッグが悪性リンパ腫と診断され、主治医・学生とともに看病に追われることになってしまったのだ。益城町への訪問も叶わない時期が続き、筆者は仮設団地の方々

に無沙汰を詫びつつ事情を説明した。同じペット飼育者として、仮設団地の飼い主の方々はずいぶん筆者らのことを案じてくださった。この件を伝えた際、S さんは、「あら、それは大変ね…。知ってるわよ、このわんちゃんでしょ？」と、2 回目にお会いした際に渡したポストカードを取り出し、筆者に見せてくれた（図 7）。

図 7　筆者が渡したポストカード

こんなものを、S さんがまだ大切に保管されていたことに感謝しつつ、筆者は、病犬の看護の大変さや不安などを S さんに語った。1 月 22 日、7 か月の闘病の末、フレンチブルドッグは死んでしまった。S さんへのインタビューは、その約 1 週間後、2 月 1 日に S さん宅で行われることとなった。

5.2　インタビュー：クッキーとの被災生活と「喪失の語り」

S さんへのインタビューは半構造化面接の形式で、他の飼い主への調査と同様、地震発生から避難所、仮設団地でのペットとの生活状況と課題、ペットの存在意義等を、時系列で尋ねる質問項目を設けていた[3]。ただ、これらの質問では、S さんに、被災後の生活状況や、何より夫と愛犬の死の経験を直接語らせることになるため、筆者は、答えるのが辛い項目は答えなくてもよいこと、いつでもインタビューを中断してよいことを強調した。S さんは快諾され、約 3 時間にわたってインタビューが行われた。会話内容は許可を得て録音した。

被災後の生活状況に関する語りの内容は、S さんとのこれまでの関わりの中で筆者が見聞きしたものとほぼ同じであり、5.1 のエスノグラフィーでの記述と概ね一致していた。しかし、クッキーとの死別や、S さん自身の生活再建の方向性については、インタビューの中でも揺れ動く語りが示された。以下では、インタビュー時の会話の流れの時系列に沿いながら、筆者と S さんとのやり取りの文字起こしを抜粋する。なお、前後の文脈を補うことばを、() 内に付記した。

インタビューの冒頭、S さんは、クッキーとの出会いについて、以下のように語った。

【S さん】「クッキーは、主人が認知症になってから、認知症の手助けになればと姪が送ってくれたんですけどね。（中略）それでずっと主人が散歩に行っててね。ほんと、主人にだけ慣れてた。（中略）でも後からねえ、わからなくなりましたけどね。クッキーのことを見せても」（中略）
【筆者】「じゃあクッキーちゃんとの暮らしっていうのは、ご主人の闘病生活と、S さんの介護の生活と一緒になっているという」
【S さん】「今、大変だったって思わないんですよ、クッキーを。主人はね、入院退院したりで大変だったけど。」

また、避難所生活でのクッキーの存在意義について尋ねる中で、以下のようなやりとりがなされた。

【筆者】「（避難所生活の中で）クッキーちゃんがいることで、良かったことってありました？」
【S さん】「それは、私がまず思ったのは、この子がいるから、主人もまだいましたから、家建てようって思ったんです。その時。友達と、一番安い家でもいいから建てようねって」（中略）
【筆者】「そういう、元の暮らしというかね、クッキーちゃんたちと過ごしてきたあのお家をね」
【S さん】「クッキーが亡くなった時も、思ったんですよ。あそこに家を建てれば、クッキーの骨は、あそこの敷地内に。今までいろいろ鳥を飼ってたんですけど。（中略）みんな庭に埋まってるんです、骨が。だから、ああそうだ。クッキーちゃんが亡くなった時も。もうほんと迷いました」（中略）
【筆者】「S さんが、お家をどうするのかで、ずっと、ずいぶん悩んでらっしゃるのが、感じられて」
【S さん】（中略）「（災害公営住宅に）入る人たちはみんなね、先が見えてますからね。あたしたちももう、10 年先、90 なんですよ。90 ってどうなってるかわからないですよ。でも、先のことはわからないから。みんな震災にあって、1 年 1 年延びていくと、1 つ 1 つ年を取っていくんですよね」

仮設団地での生活状況について聞き取りを進める中、話の流れが、クッキーとの死別の時期に差し掛かった。この話題について、筆者は次のように切り出した。

【筆者】「先週、僕も犬を亡くしたところで、クッキーのことを殊の外思い出したりしてたんですけど。（中略）うちの場合、病気だってことがわかってたから時間がかけられた。クッキー、突然でしたよね？」
【S さん】「いや、病気でした。甲状腺」
【筆者】「ああ、首のところが腫れてましたね」
【S さん】（中略）「腫れ自体は地震の前から。病院でずっと経過を見ながら。2 回調べてもらって良性だって言われて。クッキーは窒息なんですよ。あっという間に窒息。あの時にマッサージ、気道を開けてあげればなあって。後からですよ、後悔するのは」
【筆者】「首のあたりって、うちのフレブルもそうでしたけど、どうしようもないんですよね」
【S さん】（中略）「（苦しいかどうか）鳴きもしませんからね、ほんとわからなかった。（クッキーを）くれた姪が、死に方があっという間だったからいいよって。クッキーちゃんは親孝行だったって、みんな言うですよ」
【筆者】「親孝行、そう、思えるかなあ…」
【S さん】「クーちゃんも親孝行ですよ。あの子がいたら自由がなかったですから。まあねえ、1 年 1 年経つと、忘れていきますけどね」

クッキーとの死別について、S さんはこのように語った。これを受けて、筆者は、ペットとの死別をめぐる悲嘆の過程について、筆者自身が犬を亡くした経験を交えて、次のように話を進めた。

【筆者】「僕自身が現在進行形で経験しているので。ペットが死ぬことって、時間とともに変化があるなあって。（犬が死んでしまって）いないことに気が付く瞬間ってのがちょいちょいあって」
【S さん】「それはありますよー。（クッキーとの）散歩の道、今でも行けません」
【筆者】「切なくなるような場面って、いろいろあるなあと。いろんな時とか場面とかで思い出して。それがまだしばらく続くんだろうなって」
【S さん】「クッキーが亡くなってほんと。散歩してたところに行きたくない。毎日お骨を、この頃ようやく抱かなくなったの。毎日おはようって、抱いてました。いまだに、お骨はありますけどね。そろそろお墓に行こうねって言ってますけどね。（中略）私 3 年間、主人と一緒に毎月お経をあげてもらってるんですよ。（中略）私ね、思ったんです。主人のところにそっと持って行って、納骨してもらおうかなって。だめかな？（笑）」
【筆者】「それがいいかもしれないですねえ」
【S さん】（中略）「動物でも、ずっとお骨を置いていたらろくなことないよって言われるけど、そんなことないですよね！居てくれた方がいいような気がして。安心できるというか」
【筆者】「（クッキーがいなくなって）自由になる時間ができたっておっしゃっていたけど、他に大きく変わったことはありますか？いい面でも悪い面でも」
【S さん】「うーん…。やっぱり、ひとりってのはさみしいですよ。それだけ。私は。家族がいないってのはね。犬も家族って言うでしょ。ただ、それが飼えないってのがありますからね」

ペットとの死別をめぐる悲嘆のありようについて、S さんはこのように語った。筆者も初めて聞く内容が少なくなかった。この流れを受けて、筆者が次のように尋ねた。

【筆者】「ねえ。そういうのって、時間が経っても思い出すし、時間が経つほど思い出すしって感じなのかなって」
【S さん】「思い出すのはたくさん思い出しますね。でも、思い出しても悲しいとか、そういうのはないですね」
【筆者】「まあまあ、そうですねえ」
【S さん】「こんなだったねって人に話しても、よその犬の話なんか、人は聞かないから（笑）。クーちゃんをかわいがってくれた人はね、あれだけど」
【筆者】「僕から見てですけど、S さんにクッキーちゃんのことをお尋ねするのが、いつなら聞けるだろうって、ずっと見てたんですよ。亡くなってしばらくはね、僕の写真も全部しまっちゃったりして」
【S さん】「今でも（写真は）出しません。向こう（災害公営住宅）行ったらね、ちょっとやってみようかなって。あれほんと、写真見たくないんですからね。あれは飾りましたけどね」（と、テレビ台に 1 枚飾ってある写真を指差す）
【筆者】「今だからお話ししますけどね。写真があるんだったら、少しはクッキーちゃんのお話聞けるかなって」
【S さん】「食器からみんな片づけてしまいました。

ふつう取っとくていうじゃないですか。それができなかった」

【筆者】「うちの実家の犬が死んだときもそうでしたね。（中略）うちの両親も辛かったみたいで」

【S さん】「いやあ、もう辛いんですよね。さわったものが辛くて。でも首輪だけはやっぱし、なにかひとつ取っとかなきゃって。匂いがついているから、洗わなくて」

【筆者】「うちのフレンチブルもね。（中略）病院に連れて行くときに使っていたクレートとかを見ると、ああ空っぽだなって思ったり。それが切ないっていうか。（中略）そういうのって、日々の暮らしに散らばってるなっていうね」

【S さん】「まあ、それもね、なんでも、時期が来ればね。またほら、次のワンちゃんでもくれば、変わるんでしょうけどね。それができる人はうらやましいって思うけど。でもね、私思うんですけど、子供さんが亡くなった人の方がずっと辛いだろうって。代わりがないですもんね。それを考えるから、子供でなくてよかったなって」

インタビューの最後に、筆者はＳさんに次のような質問をした。

【筆者】「最後の質問ですけど。地震での経験を踏まえて、S さんにとってクッキーちゃんをはじめ、犬猫たちはどういう存在ですか？」

【S さん】「クッキーは宝ですよね。宝物。この子のために頑張らなきゃなっていうのがあるんですよね。クーちゃんがいるから家建てるって、友達には言ったんですけどね」

3 月 20 日、筆者は本稿の趣旨説明と記述内容の確認依頼のため、S さん宅を訪れた。本節を通読した S さんは、写真の使用を含めて本稿の内容を快諾され、以下のように語った。「こんな風にね、クッキーのことを聞いてもらえるのも、(仮設団地でのイベント等を通して）集まりやつながりがあったおかげですよね？元の家でクッキーが死んでも、お隣さんとか何にも言わないでしょうから（笑)」。そして、こうも語った。「ほんとにね、主人が亡くなった時よりも辛かったですからね、クッキーが死んで」。

S さんは、4 月中旬に災害公営住宅に転居の予定である。クッキーのお骨をどうするかは、その時までに考えるとのことであった。

６． ペットとともに、被災後のコミュニティを生き抜く

前節では、熊本地震で被災した女性とペットの被災生活とコミュニティとの関わり、及び、ペットとの死別をめぐる「喪失の語り」の特徴を記述した。Ｓさんにとって愛犬クッキーは、まさに梶原(2019)の言う「生を紡ぐコンパニオン」であった。震災前、クッキーはＳさんにとって、夫の闘病と自身の介護の生活をつなげる存在であった。地震発生以降、Ｓさんはクッキーとともに、避難所・仮設団地でのコミュニティの縮退に翻弄され、また、「被災者-ペットコミュニティ」の形成に助けられつつ、被災後の生活を生き抜いてきた。だからこそ、クッキーとの死別は、クッキーとともに生きてきたＳさんにコミュニティとの関係性の途絶の危機を生じさせるとともに、復興に向けたＳさんのライフストーリー再構築の困難をもたらしたと考えられる。

クッキーをめぐる S さんの「喪失の語り」には、おそらく筆者以外には語られなかったであろう、ごく私的な内容も含まれていた。例えば、「遺骨を最近まで抱いていた」「今でも散歩の道は歩けない」「写真は今でも見られない」「遺骨を夫の墓に入れたい」等のことばは、クッキーの死後 2 年半経ってなお、S さんが未だ悲嘆の過程の途上にあることを示している。もちろん、こうした語りの聞き取りについて、筆者は、パーカーが「論文で使ってはいけない表現」（パーカー, 2008; 八ッ塚, 2014）として批判するような、「筆者とＳさんとの信頼関係の元」「本当の話を聞くことができた」等と安易にまとめるつもりはない。しかし、クッキーとの死別をめぐるＳさんの語りや、それを聴き取るための場、そして、S さんと筆者との関係構築のあり方には、縮退するコミュニティにおいて尊厳をもって生き抜くための重要な論点が示唆されている。

本節では、まず、コミュニティの縮退に直面した当事者に現前する生活世界の動態の特徴について、Ｓさんの「喪失の語り」の特徴、Ｓさんとのインタビューの場の特徴、「ペット写真」の意義の 3 点から論じる。その上で、コミュニティの縮退に尊厳をもって生き抜くための論点を考察する。

6.1 Ｓさんの「喪失の語り」の特徴

S さんは、クッキーとの関係について、フィールドワーク中の会話やインタビューの場において、様々な語りを示した。特に、クッキーとの死別をめぐっては、揺れ動く「喪失の語り」が示された。やまだ（2007）は、「喪失の語り」について、「人は大

切な人を失うと、死者との過去の関係に関わる物語をつくりだす。それだけではなく、自分自身が生きていくべき未来の物語を新たにつくりだす。その自己物語は、なぜか倫理的である。」（やまだ, 2007, pp.16-17）と指摘する。S さんはインタビューの中で、「クッキーのために家を建てる」「この子のために頑張らなきゃ」と繰り返し語った。また、クッキーの死後も、「遺骨を埋葬するために家を建てる」考えがあったと述べた。クッキーはまさに、S さんの生活再建の目標設定において不可欠な存在であり、ライフストーリー再構築のための＜バイ・プレイヤー＞（矢守, 2010）であった。

一方、S さんは「（年齢的に）もう犬は飼えないから」「（災害公営住宅に）入る人たちはみんな、先が見えている」等とも語っていた。やまだ（2007）は、「喪失の語り」が、仮定法の形式を介して、可能世界を作り出すことで、未来に向けた語りを生み出すと指摘している。しかし、今回のインタビューでは、S さんから、災害公営住宅に入居後の生活についての語りは聴き取れなかった。あくまで筆者の臆見ではあるが、S さんは、震災、夫・愛犬との死別という 2 つの喪失を経験した後、現在は、自身の老いという、新たな喪失に向き合おうとしている最中なのかもしれない。それゆえ、S さんの語りに、亡き夫やクッキーへの愛と悲しみだけでなく、生活再建に向けた選択可能性へのあきらめのようなものが散見されることになったのではないだろうか。縮退に直面した当事者の生活世界には、このような、新たな意味づけのための選択肢や可能性自体の減少・途絶が現前することが示唆されると言えるだろう。ただ、S さんが、クッキーの喪失をめぐって新たな語りを示せたこと自体は確かである。今後は、この語りをどのように聴き継いでいくのかが課題となるだろう。

6.2　S さんとのインタビューの場の特徴

上述した S さんの「喪失の語り」の生成には、インタビューの場における S さんと筆者との相互作用のあり方も影響を与えていた。S さんはインタビューの中で、「よその犬の話なんか、人は聞かない」「クッキーのことを聞いてもらえるのも、集まりやつながりがあったおかげ」と語った。こうした言葉は、ペット自体やその喪失をめぐる語りを生み出すには、特別なコミュニティが必要になることを、S さん自身が感じていたことを示唆している。その意味で、筆者とのインタビューの場は、S さん自身のオルタナティブ・ストーリーを語るための、ナラティヴ・コミュニティとしての意義を有していたと言えるだろう。

しかし、インタビューの場において、S さんがクッキーとの死別をめぐる「喪失の語り」を生み出すことができたのは、単に筆者と S さんが 4 年近く関わりがあることや、たまたまインタビュー時に筆者自身がペットロスの最中にあるタイミングであったことだけが要因ではない。インタビューの過程を精査すると、S さんがクッキーの「喪失の語り」を切り出したのは、筆者が語った「ペットの死は、時間とともに変化がある」「いろんな時とか場面で思い出し、それがまだしばらく続く」ということばに応えてのことであった。即ち、悲嘆の過程の時間感覚に関わる語りが、S さんの「喪失の語り」を紡ぎ出したと考えられる。

この時間感覚は、クッキーの死後、S さん宅で筆者が過ごした時間や、ペット関連イベントでの他の飼い主らとの関わりにも見られたものであった。筆者や他の飼い主らは、クッキーの死別に伴う S さんの悲嘆を十分に理解しつつ、「喪失の語り」を決して強いることなく、ただ共に時を過ごしてきた。このような場は、「時を細かく刻んで」待機し、「場を整えるための小さな行為の積み重ね」としての＜待つ＞時間（矢守, 2019）をもたらしていたと考えられる。「悲哀の仕事」を進めるために、理論的には「喪失の語り」の生成が有用であるとは言え、宮前・渥美（2018）が厳しく批判するように、ひたすら言語化を求める姿勢は、ただちに生権力的な暴力性を帯びることになる。喪失に伴う関係性の縮退の中、その人自身の生き生きとした尊厳ある生の語りを生み出すには、新たな語りの生成を＜待つ＞コミュニティのあり方が求められることになる。S さんとクッキーとの死別をめぐっては、仮設団地の「被災者-ペットコミュニティ」においても、また、筆者と S さんとのインタビューの場においても、共に時を過ごしながら、S さん自身のことばを＜待つ＞コミュニティが形成されていたと言えるだろう。

6.3　「ペット写真」の意義

S さんからの語りを聴き取る場づくりだけでなく、筆者が熊本地震被災地でペット飼育者らと関係構築する際にも、「ペット写真」が、独特の意味を有していた。被災地コミュニティでの「写真」に関しては、津波災害等で流出・損壊した「被災写真」の返却等の実践・研究が重ねられている。宮前・渥美（2018）は、被災写真には、「今はもうないもの」「もう戻れないあのとき」「それまで営んできたなにげない日常」が写し取られていると指摘する。また、宮前らは、

ロラン・バルトのプンクトゥムの概念を用い、写真には「私が現に見ているものが確実に存在したということを保証する」ことを論じている。

筆者が飼い主に贈ってきた「ペット写真」は、「被災写真」とは異なるが、5.1 で示したように、「ペットとのなにげない被災生活の日常」が写し取られたものであった。被災後の生活をペットとともに生きる飼い主にとって、筆者のペット写真は、「家族」であり、「生を紡ぐコンパニオン」であるペットの存在を、他者（筆者）から承認されたことを示すアーティファクトとなっていたと考えられる。それはまた、被災者にとって、復興過程を一歩ずつ進める日常の記録としての意味も含まれていたであろう。だからこそ、S さんをはじめとする飼い主は、けっして巧いとは言えない筆者のペット写真を、大変喜んで受け取られたのではないだろうか。本稿で検討した「被災者-ペットコミュニティ」に筆者が参画する過程で、ペット写真の撮影・贈与が有用な手法となりえたのも、災害で縮退したコミュニティで生き抜く被災者らにとって、ペット写真が、自身の尊厳ある生の一端を示すものとして捉えられていたからであろう。

それゆえ、クッキーの死後、S さんがクッキーの写真を見るのを強く拒否したのは、そこに、「今はもういないクッキー」「もう戻れないクッキーとの生活」を見出してしまったからではないだろうか。クッキーとともに生活再建を進めてきた S さんにとって、写真を通したクッキーの不在の顕在化は、未来に向けたライフストーリー再構築の途絶さえ暗示されたのかもしれない。逆に、「クッキーの写真を見ることができるかどうか」が、S さんの悲嘆の過程の進捗を測る指標となりえた。「家族としてのペット」の承認としてだけでなく、「喪失の語り」を聴き取る適切な時機を見出す際にも、ペット写真は有効なツールであったと言えるだろう。

6.4　結語

本稿では、縮退するコミュニティに生きる人々の尊厳のあり方について、熊本地震被災地における「被災者-ペットコミュニティ」の形成過程と、ペットロスをめぐる「喪失の語り」に見られた被災者の生活世界の動態の事例から検討を行ってきた。災害を契機に縮退するコミュニティにおいて、人々の尊厳を保つためには、「生き生きとした生の実現と主体性の獲得を実現するような、相互承認的な関係がある状態」が目指される。しかし、ペットを家族と見なす人々にとって、災害は、コミュニティとの関係において「被災のイクスクルージョン」をもたらす恐れがある。災害を契機とするコミュニティ縮退の場面で、ペットも含めた人々の尊厳を実現するためのコミュニティ再編のあり方が課題となる。

熊本地震被災地のうち、益城町の避難所・仮設団地では、こうした事態に対処するため、避難ペットの一時預かり施設開設や、仮設住宅内でのペット飼育許可等の対応が取られ、ペットの物理的な住環境が保障された。しかし、それだけでは、飼育者の不安や被災者間のコンフリクトは解消されず、被災者の生の尊厳が脅かされることとなった。このような状況を解消し、被災者の尊厳ある生の回復に寄与したのは、新たなコミュニティの構築であった。ペット・飼育者・非飼育者・外部支援者らが、それぞれの立場から参加可能な「被災者-ペットコミュニティ」の形成を通して、「被災のイクスクルージョン」に抗するインクルーシブなコミュニティが形成されることとなった。その結果、被災後のコミュニティにおいて、「ペットとともに、被災後の生活を生き抜く」という尊厳が実現されることとなった。

一方、個々の被災者の状況を見ると、「ペットとの死別」によって、より困難な状況がもたらされる事例も見られた。被災後の生活の中で、ペットは、「生を紡ぐコンパニオン」として、飼い主のライフストーリー再構築の重要な＜バイ・プレイヤー＞となっていた。それゆえ、ペットとの死別は、飼い主にとって、「被災者-ペットコミュニティ」との関係縮退・途絶を意味するだけでなく、未来に向けたライフストーリー再構築の困難をももたらす。このような尊厳の危機において、まずは、ペットと死別した当事者自身のオルタナティブ・ストーリーを適切に聴き取る「ナラティヴ・コミュニティ」という関係性が必要となる。そのために、拙速な言語化を求めず、共に時を過ごしながら、当事者自身のことばを＜待つ＞コミュニティのあり方が求められることとなる。筆者は、益城町で出会った「家族」を亡くした高齢女性との長期にわたる関わりの中で、＜待つ＞関係を続けることで、当事者自身の「喪失の語り」を聴き取ることができた(4)。この関係を支えたのは、亡きペットの写真と、仮設団地で築かれた「被災者-ペットコミュニティ」に生きる多くの被災者であった。

コミュニティの縮退は、そこに生きる人々の尊厳の危機をもたらすことがある。特に、長期にわたる災害復興の過程では、新たな関係を増やし、結び続けるかたちでのコミュニティ再編を継続するのは容易ではない。被災地コミュニティの人口減少や関係性の縮退は、どのような支援を重ねても生じうるだ

ろう。そのような縮退するコミュニティに生きる人々にとって、その縮退が、「尊厳ある縮退」となるためには、当事者自身の声を聴き取る相互承認的な関係を、わずかでも継続していくことが求められる。そのような取り組みにおいて、本稿で検討した「ペット」との関係は、当事者の生の尊厳に接近するための格好の端緒となり得る。傍らにあるペットと共に、当事者自身の語りが紡がれるのを、時間をかけて＜待つ＞という関係のあり方は、コミュニティの縮退と、そこに生きる人々の尊厳を支えるために、重要な視点となると言えるだろう。

謝辞

本調査にご協力頂き、本稿への語りと写真の掲載をご快諾くださったＳさんに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。熊本地震から 4 年を迎えるにあたり、犠牲になった方々・ペット達に、心より哀悼の意を表します。

また、本研究・実践の遂行にあたり、科研費（課題番号：18K02056）他より助成を賜りました。重ねて御礼申し上げます。

本研究並びに実践に関してのデータ収集とその扱いに関しては、九州保健福祉大学倫理審査委員会の承諾を受けた（承諾番号：16-032、17-034）。

補注

(1)　梶原は、原子力災害地域では、「大地と繋ぐコンパニオン」という別の関係性があることが論じているが、本稿では割愛する。

(2)　「セラピー犬」とは、「アニマル・セラピー」（e.g., 岩本・福井, 2001）に参加するためにしつけされた犬のことである。俗称ではあるが、他に適当な名称がないため、本稿ではこの呼称を採用する。

(3)　インタビューに際して、筆者は「復興曲線」（e.g., 宮本, 2012）の台紙も準備していた。しかし、曲線の描写によって悲嘆の過程が明示化されることで、かえって語りが阻害される可能性を危惧し、今回は使用を見送った。

(4)　本稿の査読過程で、主査より、筆者の S さんとの関わり方が、ヴァスデヴィ・レディの「二人称的アプローチ」と類似しているとの指摘を受けた。このアプローチは、研究対象への向かい方として、「対象を自分と切り離さないで個人的関係にあるものとして、情感をもってかかわり、対象の情感を感じ取りつつ、対象の訴え・呼びかけに『応える』ことに専念する」特徴を持つ（佐伯・刑部・苅宿, 2019）。特に、「対象の尊厳を見る」姿勢を取り、「対象の『ほんとうのよさ』が見えるまで、自らの早急な解釈や判断を差し控え、表面に出ていない『訴え』が聴き取れるまで（ほんとうのことがわかるまで）『待つ』」ことが重要とされている。寡聞にして筆者はレディらの議論を知らなかったが、「尊厳を見るために『待つ』」アプローチは、本稿の事例における筆者のアプローチと軌を一にしていると言える。

参考文献

阿部重樹（2013）. いま仮設住宅に暮らすということ　震災学, 3, 120-126.

渥美公秀（2014）. 災害ボランティア：新しい社会へのグループ・ダイナミックス　弘文堂

平井潤子（2016）. 動物防災の 3R：準備と避難と責任と特定非営利活動法人アナイス

広井良典（2009）. コミュニティを問い直す：つながり・都市・日本社会の未来　ちくま新書

岩本隆茂・福井至（編）（2001）. アニマル・セラピーの理論と実際　培風館

環境省（2013）. 災害時におけるペットの救護対策ガイドライン https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h2506.html　(2020-03-15)

環境省（2018a）. 人とペットの災害対策ガイドライン https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3002.html　(2020-03-15)

環境省（2018b）. 災害、あなたとペットは大丈夫？：人とペットの災害対策ガイドライン＜一般飼い主編＞https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3009a.html　(2020-03-15)

環境省（2018c）. 熊本地震における被災動物対応記録集 https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3003/full.pdf　(2020-03-15)

梶原はづき（2019）. 災害とコンパニオンアニマルの社会学：批判的実在論と Human-Animal Studies で読み解く東日本大震災　第三書館

加藤謙介（2013）. 「災害時におけるペット救援」に関する予備的考察：先行研究の概観及び新聞記事の量的分析より　九州保健福祉大学研究紀要, 14, 1-11.

加藤謙介（2017）. 平成 28 年熊本地震における「ペット同行避難」に関する予備的考察：益城町総合運動公園避難所の事例より　九州保健福祉大学研究紀要, 18, 33-44.

加藤謙介（2018）. 平成 28 年熊本地震と「人とペットの減災」：「包摂／排除」の視点から　21 世紀ひょうご, 24, 40-51.

木村祐哉（2009）. ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方　心身医学, 49(5), 357-362.

児玉小枝（2011）．同伴避難：家族だから、ずっといっしょに…　日本出版社

熊本県危機管理防災課（2020）．平成 28（2016）年熊本地震等に係る被害状況について【第 300 報】https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=9&id=475&set_doc=1　(2020-03-15)

栗原彬（2015）．大震災・原発災害の生存学：生存のための身振り　天田城介・渡辺克典（編著）　大震災の生存学　青弓社　pp.21-43.

宮前良平・渥美公秀（2018）．被災写真による「語りえないこと」の恢復　実験社会心理学研究, 58(1), 29-44.

宮本匠（2012）．復興を可視化する：見えない復興を見えるように　藤森立男・矢守克也（編著）　復興と支援の災害心理学：大震災から「なに」を学ぶか　福村出版　pp.114-132.

宮本匠　(2016)．減災学がめざすもの　矢守克也・宮本匠（編）　現場でつくる減災学：共同実践の五つのフロンティア　新曜社　pp.165-188.

森川すいめい（2013）．漂流老人ホームレス社会　朝日新聞出版

室崎益輝（1997）．仮設住宅の建設と生活上の問題点　神戸大学＜震災研究会＞（編）　阪神淡路大震災研究 2：苦闘の被災生活　神戸新聞総合出版センター　pp.115-127.

NHK スペシャル取材班(2017)．縮小ニッポンの衝撃　講談社現代新書

新島典子（2001）．ペット喪失体験（ペットロス）はなぜこんなにつらいのか：リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について　現代社会理論研究, 11, 225-238.

野口裕二（2005）．ナラティヴの臨床社会学　勁草書房

小此木啓吾（1979）．対象喪失：悲しむということ　中公新書

大澤真幸（1991）．身体の比較社会学 I　勁草書房

パーカー, S.　八ッ塚一郎（訳）（2008）．ラディカル質的心理学　ナカニシヤ出版

レイヴ, J.・ウェンガー, E.　佐伯胖（訳）（1993）．状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加　産業図書

佐伯胖・刑部育子・苅宿俊文（2019）．ビデオによるリフレクション入門：実践の多義創発性を拓く　東京大学出版会

齊藤康則（2016）．仮設住宅におけるコミュニティ形成を再考する：東日本大震災「あすと長町仮設住宅」における生活課題とネットワークの展開　地域社会学会年報, 28, 61-75.

坂口幸弘（2010）．悲嘆学入門：死別の悲しみを学ぶ　昭和堂

桜井富士朗・長田久雄（編著）（2003）．「人と動物の関係」の学び方：ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう　インターズー

澤田雅浩（2018）．避難生活支援からはじまる復興プロセスとそのプランニング　室崎益輝・富永良喜・兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科（編）　災害に立ち向かう人づくり：減災社会構築と被災地復興の礎　ミネルヴァ書房　pp.145-166.

島薗進（2019）．ともに悲嘆を生きる：グリーフケアの歴史と文化　朝日新聞出版

菅磨志保（2007）．新しいコミュニティの形成と展開　浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛　復興コミュニティ論入門　弘文堂　pp.97-99.

渡辺克典（2015）．はじめに　天田城介・渡辺克典（編著）　大震災の生存学　青弓社　pp.11-20.

山田昌弘（2004）．家族ペット：やすらぐ相手は、あなただけ　サンマーク出版

やまだようこ（2007）．喪失の語り：生成のライフストーリー　新曜社

山地久美子（2013）．災害復興公営住宅とペット飼育の課題：東日本大震災の復興に阪神淡路大震災・中越地震の経験を活かす　兵庫地理, 58, 1-8.

矢守克也（2010）．アクションリサーチ：実践する人間科学　新曜社

矢守克也（2019）．〈待つ〉時間―補論：アクションリサーチの〈時間〉―　災害と共生, 2(2), 1-8.

八ッ塚一郎（2014）．理論を帯びた研究、理論という名の方法　川野健治・八ッ塚一郎・本山方子（編）　物語と共約幻想　新曜社　pp.15-31.